

Zur Publikationsgeschichte der Blendung von Herbert G. Göpfert ヘルバート・G・ゲプフェルト「眩暈の出版史」

どんな本も、カネッティの Die Blendung のような異例の出版史を持つことはなかっただろう。作品とその作者の独自性、来るべきカタストロフィに向けて歩みを早める時代、そこで、この作品は成立したのだが---殆ど人は、その時代がこの作品を生み出したと言いたいくらいだが---また結局、偶然としか言いようのないものが、この歴史を規定したのである。通常であれば、文学的作品の出版について語る必要は特別にない。著者が作品を完成すれば、出版される。それから「受容」と影響が語り始められる。受容の前提として出版はなるほど必要だが、しかしそれは自明なことに思える。だが出版が問題を抱えるとき、事態はどうだろう？以下に伝えられる事実は、この点で、さまざまの指摘を与えることになるだろう。

小説の原稿は 1931 年 10 月には完成していた。著者の名前は、文学の世界ではまだ知られていないも同然だった。僅かにアプトン・シンクレアの二つの翻訳「愛という悩みの道」と「お金が手紙を書く」で、カネッティを読むことが出来るだけだった。二つとも 1930 年ベルリンで（1932 年更に「アルコール」が出版された）。しかし小説の出版社は見つからなかった。ベルリンの S・フィッシャー出版が 1932 年、この小説の後、間もなく成立した戯曲『結婚』を販売し、通常通り、舞台用原稿としてプリントしていたが、膨大な長編小説を出版する危険を自ら引き受けることは望まなかった。1932 年にはすでに政治的緊張感が満ちており、文化的生活も萎縮し始めていたことに帰せられるかもしれない。その後 1933 年初頭からは、ドイツでの出版の可能性は、もはやまったくなかった。しかし現存のオーストリアあるいはスイスの出版も、その販売能力が非常に限定されているのを全く除外しても、そのあり方によって、この処女作にとっては、ほとんど問題にならなかった。

しかし以後ヴィーンでの数年間、カネッティはもはや未知のまま留まることはなかった。ヴィーンの様々なサークルやグループの、文学に関心ある人々が彼を知っていただけでなく、彼もこの小説から何度となく---間もなくドラマ『結婚』からも---私的にまた公的に朗読を行った。これら朗読会のひとつを、1933 年 1 月ヘルマン・ブロッホが下準備していた。だから、この小説について知っているだけでなく、すでに著者たるカネッティに、何らかのものを認める人たちがいた。これらの朗読会のいくつかについて---また部分的だが、聴衆の様々な反応について---カネッティは 3 番目の思い出の本で報告している。またこの自伝では、新たに創設されたヴィーンのヘルバート・ライヒナー出版で、その後 1935 年、どのようにして小説出版に到ったかが述べられている。カネッティが知り合っていた、シュトラスブルクの新聞発行者ジャン・ヘプフナーが、危険を承知で引き受けていた。しかし、この既にして通常ならざる事実以上に注目すべき点は、出版の同意に到ったその流儀である。書物はヘプフ

ナーにとって重要な意味を持っていたが、彼は人間の善意に対する信仰に満たされていた。彼の経験によれば「悪い」人間は全く存在しない。彼らはただ偽りの意図に屈服したにすぎないと言ってはならず、彼らを有るがままに見なければならない。それが詩人の務めである。「もし悪い人間が存在するのであれば、その様子は世界でどんな風に見えるのか」、必要ならば、「懲らしめ」のために、立派に書かれた書物の中で、「錯覚として」一度は見せてもらってもよいと言う。彼によれば、そのような一冊の書物がカネッティの物語 *Die Blendung* であると思われた。彼は成る程、それを読みたいとは思わないと言う。そして読むこともなかった。しかしその出版は可能にしたいと言う。彼を動かし、あるいはまさしく確信させたのは、書物ではなく、その著者である人間エリアス・カネッティだった。だから、この人間的な作用が、カネッティの作品の出版史の冒頭にあるのである。小説の出版は疑いようもなく、ひとつの「文学的成果」だった。それを証明している批評の中でも、勇気ある、称揚すべき行為として、「フランクフルト新聞」のペーター・フォン・ハーゼルベルクの断固たる、理解力ある書評が挙げられねばならない。オーストリアで出た書評の内、「銀のボート」のエルンスト・ヴァルディンガーのそれが、更に後に残る影響を持つことになった。ブダベスト、プラハ、オランダ、スイスでも、重要な機関誌で書評が出たことは、出版社がその本と新しい著者を有名にするために、骨を折ったことを示している。本のカバーを作るために、出版者はアルフレート・クービンを獲得していた。クービンはこの本に大層魅惑されたので、大喜びで挿絵を描いたことだろう。クービンの最初のカバー構想を、出版者は当然ながら拒否した。書物の上の一匹のひきがえるだった。デザイン画家には、テレゼがそのように見えたのである。（だがクービンの遺稿に、この挿絵は発見されなかった。）小説が恐らく販売の成功とならなかったのは、その時代の出来事や非常に限られた配布領域を考えれば、よくわかる。しかし書評を越えて、小説はカネッティに正当な評価をもたらした。アルバン・ベルク、トーマス・マン、ロベルト・ムジールによってである。今や、この本の影響が現れ始めるのも可能だったろう。しかしその影響は、1938年春のオーストリア併合後、過ぎ去った。1938年秋、カネッティは亡命した。

そうであるにも拘わらず---ただ書評によってだけでなく---小説の影響が直ちに外国でも明らかになった。それは、これまで文献リストには掲載されていたが、既に 1937 年---1936 年と前日付で---ウィーンの初版引き渡し 1 年半後、プラハの L・マザック出版でチェコ語の翻訳（ズデンカ・ミュンズローバによる）が出ていたことは、殆ど気づかれていなかった。この出版社は、シリーズ「世界文学の同時代小説」公刊を始めた。問題になっているそれぞれの国が、ひとつの小説で代表されることになっていた。チェコの出版社が、現代のオーストリア文学に名前を挙げたのは、ウィーンの *Die Blendung* だった。カネッティは朗読のため、プラハへやって来た。朗読は少なからぬ注目を浴び、その地の文学サークルと知り合

いになった。チェコ語の翻訳は、多分売れ行きも非常によかったろう。存在したに違いない書評は、残念なことに、これまで知られていない。それを探し出すのは、やり甲斐のあることだろう。再びここでも、まず 1938 年、次いで 1939 年春、政治的な事件が生じた。文学的な生活を屈服させ、それによって、この本の更なる影響を、チェコスロバキアでも遮断する出来事である。

文献では、小説の次の出版として 1946 年、だから 10 年後、イギリスのジョナサン・ケイプのもとで出版された英語の翻訳が挙げられるが、どんな出版社も、戦争中、やはり相変わらず無名だった著者の、このように難しい本を、世の中に出すのを望まなかっただろうという想定は容易につく。しかし事情は違った。亡命した小説の読者たちに刺激されて、出版社のジョナサン・ケイプは、これは強調されねばならぬが、戦争中に英語版の公刊を決心していた。翻訳者は歴史家のシスリー・ベロニカ・ウェヂウッドで、彼女は、著者との緊密な共同作業で作品に取り組んだ。

出版社との契約は 1943 年に結ばれた。しかしカネッティは、戦争終結後、初めて翻訳を出してもよいと条件を付けた。というのも、そのような亡命者の本が戦争中に公刊されるのは、「適切でない」ように思えたからである。その理由だけから、翻訳はようやく 1946 年に出版された。またしても推測できるだろうが、このような本が、戦後間もなく、多くの読者を見つけることはなかったろう。しかし事情は反対だった。それは、イギリスの文学的風土と文学的要求と関係するに違いない---そして正確な分析に値するだろう---「焚書」(Auto da Fé)と、小説はそこで呼ばれたが、この本はすぐさま大きな注目を浴び、さらに 1946 年には第 2 版が、続く年、1947 年にはそれ以上の版が必要だった。多種多様な定期刊行物の反響(Dieter Dissinger を参照)、しかもさまざまな新聞や雑誌での反響は、この事実をよく反映している。この本の地位は周知のものになった。例えばウォルター・アレンは、この関連でベン・ジョンソンを指摘した。イギリス版とイギリスの批評によって、この小説は、初めて長期にわたり目に見えるものになったと言ってよい---50 年代には、書物で何度となくこの小説が指摘された。最も重要で、Die Blendung に関わる更なる仕事にとって決定的になったのが、ヤコブ・イザックによる BBC 書評である。彼は 1950 年、BBC の第 3 番組から、前半世紀の文学を回顧し、彼の見解から、心に残る作品の特質を描くように要請されていた。これら多くの注目を浴びた、6 本の 1 時間講演では、ドイツ語作家の名前が僅かしか挙げられていないが、この講演は、その後 1951 年、本として出版された。それに反して、1947 年、ニューヨークのクノプフで出版された翻訳版に対しては、多分、批評の反応は乏しいものだった。

奇妙なことに、その後フランスで本の出版の引き金になったのは、この成果ではなかった。ひょっとすると、戦後の最初の数年間、出版者同士のお互いの接触は、まだ大して強くなかったろう。1949 年、この小説はポール・アルテックスのフランス語翻訳(「バベルの塔」La tour de Babel)

で、B・アルトーのもと、グルノーブルとパリで出版されたが、ここでは、パリで医者として暮らすカネッティの弟が、アルトーの出版社主、ジャン・コントーと知り合いになり、本について彼に言及していた。小説とその著者の意義について直ぐさま確信したコントーによって、他の者たちも再び「バベルの塔」に注目するようになった。その例は、この本がフランスで最初の文学賞、誰もが望む 1949 年度最高の外国小説「国際賞」(Prix International)授与の際、そのことに寄与したレイモン・クノーだった。これに反して、批評家マルセル・ブリオンは 1936 年のドイツ語初版で作品を知っており、それがようやく「こんなに遅く」フランスで出版されたことに、驚きを禁じ得なかった。

ではこの本のドイツでの更なる運命は？イギリスやフランスとはすっかり事情が違っていた。芸術作品の認知や受容が、如何に強く、その時々々の時代史的状況に依存しているかを示したのである。成る程まず最初、外部的必要条件は好都合であるように見えた。エルンスト・シェーンヴィーゼにより 1946 年秋ヴィーンで発行された「銀のボート年鑑」で、あのエルンスト・ヴァルディンガーの書評(1936 年 6 月の)再印刷によって、ミュンヘンのヴィリィ・ヴァイスマンは、その小説に注目していた。そして彼の原稿審査係ルードルフ・ハルトウングに支援され、1948 年、2 回目のドイツ語小説の出版を行った。ハルトウングによって---それ以来、彼はカネッティの作品刊行では、徹底的に同伴したが---この本について、最初の詳細な、印象的ドイツ語論文が生まれた。しかしその他の反響は乏しかった。書評は少数の例外を除いて、このような作品に対して、ヨーロッパの伝統から孤立した批評の、途方に暮れた様子を映し出している。しかしまた、あの廃墟の時代に、この本に立ち向かうことの無能力さをも。古い「フランクフルト新聞」のマックス・フォン・ブリュックは、当然ながら刷本に打撃を与えることが出来た。だがこの本は行き渡らなかった。それに加えて出版社は---1948 年の通貨切替後、少なからぬ者たちと同じく---財政的危機に陥った。そして Die Blendung がフランスで文学賞を受賞した、ほぼ同じ時期、この小説はドイツで原価以下の値で投げ売りされた。そんなわけで、2 回目のドイツ出版もまず最初は、ほとんど何の結果もないままだった。

50 年代には、幾多の出版の試みがなされた。しかも、最も名高いドイツの出版社で---けれど成果はなかった。人々がドイツでこの小説に対して向き合った余所余所しさ、その特徴的な点は、---今日の視点からは理解不能だが---ハンプルクのクラッセン出版社さえも、この出版社は 1960 年、長い仕事の後、完成していたカネッティの二番目の主要な作品「群衆と権力」を出していたが、Die Blendung を引き受けようと望まなかった事実である。「群衆と権力」は、いわゆるエッセイ的文学に対して、何はともあれ用心深く向き合うドイツでは、定期刊行物においても、まず最初は全く限られた反響しかなかった。イギリスとは---またしても---違っていた。ここでは、既に 1962 年、ヴィクター・ゴランスのもとで出版されたキャロル・スチュワートの翻訳が、実り豊かな幾つかの書評で、活発に議論

されていた。しかし同時に、同年春、驚くべきことに、定期刊行物によって同じく大いに注目された「焚書」の第4版が出版された。

文献学的日付けだけに頼れば、ついに1963年、ミュンヘンのカール・ハンザー出版社で出た新しいドイツ版は、「群衆と権力」並びにイギリスにおける最新の公的注目度の結果と見る事が出来よう。さてここで、この文章の作者は、証人として自ら介入しなければならない。私が---当時、ハンザー出版社文学部門の原稿審査係---証言しなければならないのは、クラッセンの「群衆と権力」も私は知らなかったし、イギリスのカネッティ公刊についても、何も聞いていなかったことである。パリで折りに触れ、ある本について私に力を込めて指摘したのは、むしろアルトー出版のジャン・コントーだった。全くドイツ的な響きのない名前を持つ「重要なドイツの著者」の、それまで私が完全に未知だった小説について。幾つかの突発事故の後、どのようにしてその後、小説の公刊に到ったかを、ここで詳細に記述する必要はない。しかし1963年ドイツの第3版にとって、以前より「状況は好都合」だった(Dissingerを参照)というのは、一般的に必ずしも当てはまらない。書籍店から見ると、二度も継続的な成果のなかった本を、約30年後に世間に普及させるのは、法外なほど難しかった。それを達成するためには、出版社の多大の苦労が必要だった。しかしその試みは成功した。とりわけ、何人かの指導的な批評家の、積極的協力のおかげでもある。あの小説版について初めて書いた批評家の中で、特にギュンター・ブッシュの名前が挙げられねばならない。まだ同じ年に、新版が必要になった。数年後、小説は文庫本としても出版され、読書倶楽部のプログラムにも採用された。それ以来、この小説はドイツの書籍市場に参列している。

これで、長い時間の後、ドイツ語で書かれた小説は、その言語空間でしっかりした場所を見つけた。それは確かに自明なことではなかったが、ようやく今になって、小説の国際的な影響が広がりを見せ始めた事実は、少なからず驚くべきことである。確かにこの点で、イギリスの翻訳の強い影響、1964年、それにアメリカ合衆国の最新版が続いたが、「群衆と権力」がこの二つの国で見いだした注目、並びにドイツの出版者の努力が、大きく共に作用したのである。そして当然ながら、更なる、とりわけカネッティの新しい書物、それは今や1964年からまず最初、矢継ぎ早にハンザー出版社で出されたが、これらが、彼の思考世界と人格を間もなく広々と目に見えるものにした。それにも拘わらず、このような求める所の多い、1930年の状況から書かれた処女作が、その成立から40年以上経て、多くの言語に翻訳されるという、通常ならざる現象が続いている。それ故、まだカネッティのノーベル賞授与前の1981年までに、この小説は、既に18の国で出版された。そのことは、この本に内在する生命力自身以外のもの、例えば何らかのアレンジ、あるいは外面的作用といったものによっては説明できないのである。